

## 平成28年度徳島大学総合科学部部局長裁量経費

### 総合科学部創生研究プロジェクト実践報告

### モラエス顕彰による地方創生プロジェクト

宮崎隆義<sup>1)</sup>, 石川榮作<sup>2)</sup>, 佐藤征弥<sup>3)</sup>, 境泉洋<sup>3)</sup>

1) 徳島大学教養教育院, 〒770-8502 徳島市南常三島町1-1, E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

2) 徳島日本ポルトガル協会, 〒770-8572 徳島市中徳島町2-5

3) 徳島大学大学院社会産業理工学研究部, 〒770-8513 徳島市南常三島町2-1

## A Report of the Project Studies in 2016

### Regional revitalization project through W. de Moraes

Takayoshi Miyazaki<sup>1)</sup>, Eisaku Ishikawa<sup>2)</sup>, Masaya Satoh<sup>3)</sup>, Motohiro Sakai<sup>3)</sup>

1) Institute of Liberal Arts and Sciences, Tokushima University, 1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki.takayoshi@tokushima-u.ac.jp

2) Tokushima Japan-Portugal Association, 2-5 Naka Tokushima-cho, Tokushima 770-8572, Japan

3) Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University, 2-1 Minami Josanjima-cho,  
Tokushima 770-8513, Japan

#### Abstract

This report is a record of the social action activities of Moraes Studies of Tokushima University between April 2016 and March 2017 financed by the Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University. Moraes Studies Group, launched on July 31, 2010, the members of which are Takayoshi Miyazaki (English Literature, Comparative Literature), Eisaku Ishikawa (German Literature, Comparative Literature), Masaya Satoh (Plant Physiology), Motohiro Sakai (Clinical Psychology), all in that time at the Institute of Socio-Arts and Sciences, Tokushima University, has been continuing analytical research on Moraes's works and trying to open new facets of Moraes's biographical aspects, along with the social action activities of organizing exhibitions and lectures on Moraes with other related groups in Tokushima.

As the basic activities, we held regular meetings nine times during that time, and we read and discussed the Moraes's last work "*Relance da Alma Japonesa*". We also held two regional revitalization events, one was a lecture on Fado entitled "Fado and Amália Rorigues" with Prof. Mauro Neves as a guest lecturer, and the other was the cinema viewing party of "A Ilha dos Amores", which is the movie about Moraes's life, with Yoko Otake as a guest speaker. She was a secretary of the producer of this movie, and she told about many interesting episodes in producing the movie in Japan and in here Tokushima.

**Key Words:** Wenceslau de Moraes, Tokushima, Moraes Studies, social action activities, Fado lecture, "A Ilha dos Amores"

## 1. はじめに

徳島大学総合科学部モラエス研究会（以下モラエス研究会）は、モラエス研究に新しい切り口を見つけ、その発表の場としての役割を担うことを目的として2010（平成22）年7月31日に発足した。モラエスは文学において興味深い研究対象であると同時に、徳島の地域資源でもあり、地域創生を目指した活動に取り組んでいる。モラエス研究会発足後、すぐに徳島日本ポルトガル協会と連携することができ、協力してモラエスの顕彰活動や一般市民向けの啓発活動の実施にも努めてきた。2015（平成27）年には、眉山山頂にあったモラエス館の閉館に伴い、所蔵していた展示資料の一部を預り、徳島大学総合科学部2号館地域交流プラザの一角を臨時モラエス館として展示を継続した<sup>1</sup>。

本稿では、モラエス研究会が平成28年度総合科学部創生研究プロジェクト（部局長裁量経費）の助成を受けて実施した研究成果及び実践内容について報告する。なお、実践内容の一部に、2017（平成29）年3月に発行した論集<sup>2</sup>と重なる所があることをおことわりしておく。

## 2. 調査研究活動

### モラエス研究会例会

モラエス研究会発足以来、モラエスの著書をテキストとした読書会を主体にした例会を、おおよそ月1回のペースで開催してきた。『徳島の盆踊り』、『おヨネとコハル』を読み終え、2014（平成26）年8月から『日本精神』（岡村多希子訳、徳島県立文学書道館、2014）をテキストとしており、2016（平成28）年度も引き続き『日本精神』を用いて、下記のように実施した。

- ・2016(平成28)年4月23日 【研究会例会・読書会】
- ・2016(平成28)年6月25日 【研究会例会・読書会】
- ・2016(平成28)年7月30日 【研究会例会・読書会】
- ・2016(平成28)年8月27日 【研究会例会・読書会】
- ・2016(平成28)年11月19日 【研究会例会・読書会】

- ・2016(平成28)年12月24日 【研究会例会・読書会】
- ・2017(平成29)年1月28日 【研究会例会・読書会】
- ・2017(平成29)年2月18日 【研究会例会・読書会】
- ・2017(平成29)年3月25日 【研究会例会・読書会】

『日本精神』は、モラエスが最後の作品と決めて著した、彼の日本論の集大成である。同書の中で、日本の未来についてこう述べている。「時として、しっかりとした、均衡のよくとれた魂は、光輝いて、彼らを栄光へと至らしめる。したがって、外見が欺かないとすれば、日本の魂、「ヤマトダマシイ」は遠くへ、はるか遠くへ行くであろう。」(220頁)、と文明と精神の発展を期待している。しかし、一方では「日本文明の美しかったすべてのものがすさまじい速さで消えている。外国人にとって日本がなお沢山の魅力を提供しているとしたら、それは、それらの魅力が、いきなり掃き出すのが不可能になるほど沢山あったからである。だが、— 確信しようではないか— 数十年以内に、その自然の魅力は別として、日出づる国は、諸様相の美に関して、恐ろしい驚くべき凡庸さに陥っているであろう。」

(215-216頁)、と日本的美の消滅に大きな危惧を抱いている。このようなモラエスの予言が、現実の日本社会ではどうなったか、読書会では様々な議論が交わされた。これについては整理して別の機会に報告したい。

### 成果の公表

モラエス研究の成果として以下のように論文や報告書等を刊行した。

- ・「平成27(2015)年度徳島大学総合科学部学部長裁量経費総合科学部創生研究プロジェクト実践報告「グローバルズムとモラエス—モラエスが世界に広げた〈徳島の自然・人・心〉の再構築—」, 2016. 宮崎隆義・石川榮作・佐藤征弥・境泉洋, 『徳島大学地域科学研究』第6巻, 18-25頁
- ・「モラエスの庭—(6) モラエスの目：徳島の風景—」, 2016. 宮崎隆義・石川榮作・佐藤征弥・境泉洋, 『徳島大学地域科学研究』第6巻, 26-29頁

<sup>1</sup> 徳島大学とアミコの2箇所に分けて展示されていた資料は、徳島市中央公民館3階に開設されたモラエス展示場に集約され、2017（平成29）年5月29日より展示されている。

<sup>2</sup> 徳島大学総合科学部モラエス研究会編「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集3号

- ・「モラエスがみた「鳴門の渦潮」—風景論の立場から—」, 宮崎隆義, 兵庫・徳島「鳴門の渦潮」世界遺産登録推進協議会編『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学

術調査報告書～文化編～』, 255-280 頁

また、モラエス研究会では、研究会に参加するメンバーらの寄稿による『「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集』を2014（平成26）年から年1回刊行しているが、第3号を2017（平成28）年3月に刊行した。本号では8名から11の原稿が寄せられた。以下に執筆者とタイトルを記す。



1. 「平成28（2016）年度活動報告」石川榮作
2. 「モラエス病患者第一号・小西フサ」近藤文子
3. 「Reiance モラエスと俳句」桑原信義
4. 「モラエス翁記念碑について」佐藤征弥
5. 「モラエスの母国「ポルトガル語」が日本の外来語となった由来」井村良明
6. 「モラエスと徳島の青石の井戸」長尾啓太郎
7. 「暑気払い人物点描～夏のモラエス読書会の後で～2016年7月30日（土）」長尾啓太郎
8. 「モラエスが出入りしていた岩本さん宅を訪れて」石川榮作
9. 「昭和南海地震から70年目の年に」本田壮一
10. 「琴線にふれるポルトガル旅情」渡 忍
11. 「ポルトガル・レイリア市（姉妹都市）からの「少年・少女スカウトの日本ジャンボリ参加体験記」渡 忍

3. モラエス顕彰—平成28(2016)年度の活動記録—

本研究プロジェクトに係るモラエス顕彰事業を以下のように展開した。

- ・モラエス誕生日を祝う行事  
日時：2016（平成28）年5月30日（月）  
場所：徳島大学総合科学部2号館多目的室①臨時モラエス館

5月30日はモラエスの誕生日であり、誕生日を

祝う催しを開いた。前半は朗読サロン「さざなみグループ」の住友美代子氏によるモラエスの作品の朗読があり、後半はモラエス館閉館を機に作られた歌「モラエスごころ～孤愁（サウダーデ）～」が披露された。作詞を担当された東根泰章氏が作成の経緯を説明された後、作曲の根井正信氏のギター伴奏で、モラエス会の丁山俊彦氏が熱唱された。



- ・ポルトガルファド講座2016「ファドとアマリア・ロドリゲス」

日時：平成28年9月17日(土)10時30分～12時  
場所：徳島大学共通教育号館202教室

今年度も徳島日本ポルトガル協会との共催で、ファド講座を開催した。今回は、上智大学外国語学部ポルトガル語学科のマウロ・ネーヴェス教授を招き、「ファドの女王」と讃えられた故アマリア・ロドリゲスの生涯と魅力を、音と映像を交えながら解説していただいた。



- ・ギャラリー新蔵第18回特別展「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト展示会」

日時：2016（平成28）年9月26日～12月26日  
場所：徳島大学日亜会館「ギャラリー新蔵」

ギャラリー新蔵は徳島大学新蔵キャンパス内に建

つ日亜会館の1階にある展示スペースである。2012（平成24）年に第2回特別展「文豪モラエスの徳島～ひとりのポルトガル人が生んだ絆 徳島来住100周年を前に～」を開催したことがあり、モラエス関連では2度目の展示となった。今回は、モラエス研究会によるモラエス顕彰事業の展開をパネル展示した。



・『恋の浮島』講演会と映像研究会

日時：平成28(2016)年10月15日(土)13時～18時  
場所：徳島大学共通教育4号館301教室

モラエスの生涯を描いた映画『恋の浮島』は、日本とポルトガルの合作で制作され、1982（昭和57）年に公開された。2015（平成27）年暮れにDVD化され、モラエス研究会では非営利の上映会を開くことができる業務用のDVDを購入し、10月15日に一般公開で上映会を開催した（徳島日本ポルトガル協会とNPO法人モラエス会共催）。

映画の上映に先立って大竹洋子氏（岩波ホール前企画室長、元東京国際女性映画祭ディレクター、一般社団法人日本ポルトガル協会理事）の講演が行われた。大竹氏は、この映画の製作者である岩波ホール支配人高野悦子氏の秘書を務められており、同作品の日本での撮影の様子について詳しくお話を伺うことができた。なお、大竹氏には映画製作と徳島ロケの様子について『モラエス顕彰による地方創生プロジェクト』論集2号に寄稿していただい



る<sup>3</sup>。

また、研究会代表の宮崎隆義による活動としては、平成26(2014)年度には四国コンソーシアムのe-learningの授業に「モラエスの徳島～グローバリズムと異邦人～」を企画し、後期に開講したが、現在も継続して開講している。

4. 今後の展望

例会・読書会、研究活動

今後も研究会例会・読書会を毎月1回の開催を目標に継続していきたい。研究会では参加者のそれぞれが自分の立場から取り組んでおり、継続してモラエス研究の論文や活動報告などを刊行する計画である。

また、眉山山頂にあったモラエス館が閉館したのに伴い、収蔵品はアミコビル1階の専門店街の一角と、総合科学部内に臨時的措置として移され、展示が続けられたが、展示中に気づいたことだが、展示資料の中には来歴の不明確なものも含まれていた。展示資料を整理精査して何らかの形で公表することを計画している。さらに、資料や展示ケースの中には傷みの激しかったり、解説が間違っているものもあり、改善が必要である。これらの資料は、現在、徳島市中央公民館にモラエス展示場に場所を移してそのまま展示されているが、このような点の改善を含めて展示のあり方について提言していきたい。

他団体との連携と顕彰活動

モラエス研究会の発足以来、徳島日本ポルトガル協会およびNPO法人モラエス研究会の協力を仰ぎ、数々の催しを主催したり参加したりしてきた。今後も密接に連携して顕彰活動を活発に行っていく予定である。

地元の貴重な文化的な遺産であるモラエスを若い世代に伝えることは我々の大きな使命のひとつと考えている。例会やイベント等への学生の参加も少しずつ得られているので、さらに今後も各種イベントを周知し学生の参加を広げていきたい。モラエス研究とモラエス顕彰事業を通して、モラエスの作品についての十分な紹介を図り、同時に、グローバルということを常に

<sup>3</sup>徳島大学総合科学部モラエス研究会編「モラエス顕彰による地方創生プロジェクト」論集2号

考え意識しながら、学生や地域の市民、さらには他の地域に対してもモラエスを軸とする文化継承並びに地方創生の可能性を探っていくことを考えている。

また、モラエスと直接関わることではないが、2015（平成27）年3月に当研究会のメンバーが、徳島市の姉妹都市であるポルトガルのレイリア市を訪問した。2019（平成31）年には、両市が姉妹都市提携を結んで50周年を迎える。それに向けてレイリア市およびレイリア工科大学との学術的交流を、徳島市や徳島大学国際センターと連携しつつ実現させたい。

また、徳島大学では2017（平成29）年度から既存の組織の枠組みを超えて研究者が連携する研究クラスターを構築して、研究の質と創造性の向上を図っている。モラエス研究会においても、ドイツ兵俘虜研究会や鳴門の渦潮の世界遺産登録推進や自然保護に関わってきた教員らと一緒に研究クラスターを構築した。徳島の文化歴史遺産および自然遺産は、ポルトガルの文学者モラエスや、ドイツ人俘虜収容所および日本初演のベートーベンの第九交響曲、鳴門の渦潮、ドイツの伯爵邸を参考にして日本で二番目に作られた西洋風近代公園である徳島中央公園など、世界との関わりが顕著である。それはまた、徳島が日本の地方都市として世界にアピールする上で極めて有利な要素を持っているということでもある。これらを有機的に結びつけて、研究・啓発活動を効果的かつ面的に推進するとともに、新たな展開を図っていきたい。